

# 内モンゴル東部地域における「民族分裂案件」の実態 —ホルチン左翼後旗を中心として—

## A Case Study about ‘Anti National Separatism’ in Qurchin Left Front Banner, Inner Mongolia

ボヤント

桐蔭横浜大学大学院法学研究科

(2014年9月20日 受理)

### I. はじめに

1964年、内モンゴル東部地域のホルチン左翼後旗（以下は「後旗」と省記する）における教育システムの一つの機関であるガンジガ第一中学校（甘旗卡第一中学校、以下は「一中」と略記する）で、「民族分裂案件」が発生した。この案件は1964年に発生してから1969年にて、5年以上も続いた。本稿では、この案件の発生原因と過程、および結果を明らかにする。具体的には、後旗における現地調査および当時の後旗に関する一次資料である公文書を用いて、中共後旗委員会や中共ジリム・アイマッグ委員会から「民族分裂案件」と定義された案件の実態を検討する。

現地調査によると、後旗の人々、政府、社会全体がこの案件を殆ど一律に「民族分裂案件」と「公式的」には認識しているが、認識と事実との間にかなりの距離がある。この案件はモンゴル人への教育に大きな影響を与え、さらにそれによって後旗の教育に関する様々な問題が歪曲され続けた。その結果、今日の後旗における教育にも影響を与えるよう

になっている。本稿において「民族分裂案件」の問題を解明することは、既存の民族問題研究と内モンゴルにおける文化大革命の研究の空隙を埋め、今後の研究の端緒としても有意義なものとなろう。

### II. 歴史的背景と政治的背景

#### 1. 日本人と後旗におけるモンゴル教育の概略

(1) 中国側の研究で、内モンゴル地域の教育、とくに東部地域の教育は1949年10月1日から始まった、と公式に定義されている。後旗における近代教育は、1905年のメーリン・シボ（麦林希伯）学校（モンゴル人の生徒のみ受け入れる）が学校として最初のものとして始まった。この学校は、メーリン（当時の行政職務）であるウリジ・バイアル氏の住宅を校舎として設立され、ウリジ・オチル氏が校長（学監）になった<sup>1</sup>。1932年3月、新京（今の長春市）で満州国が成立して、後旗は、「東科後旗」と言う名前となって、満州国に属された。旗の所在地は、ジリガラン鎮であり、エリデ

ンビルゲ（包善一）氏が旗長に任命された<sup>2</sup>。満州国時代に、興安省の行政機関は、モンゴル王宮と協議して、モンゴル地域に近代的な学校を建て、モンゴル人の子供たちに教育を受けるチャンスを与えた。1933年、日本人によって、後旗で二つの小学校が建てられ、それを「国民小学校」と「優秀小学校」とそれぞれ名付けた。その一方、その他のヌタッグ（旗の下級行政機関、「区」とも言う）でも、学校が建てられ、1939年になると、16個の小学校（各ヌタッグ当たり1学校）が建てられ、日本語を「国語」として、モンゴル語と漢語を「満州語」として学習していた<sup>3</sup>。1945年8月15日までには、後旗で、「国民優秀学校」が10校、「国民学校」が5校あって、教師の人数が117名で、生徒が3,704名であった<sup>4</sup>。

満州国の興安局は、各旗の王公を招待し、蒙民厚生会を設け、モンゴル人の教育を「振興事業」として応援した。ワンイーン・スム（王爺廟）での「育成学院」と後旗のエケ・タラ（伊胡塔拉）での「産業技術学校」が有名であった。これ以外に、蒙民厚生会は、モンゴル人生徒やモンゴル人学生に対する補助金を確保し、奨学金を発給していた<sup>5</sup>。これらの事が満州国と後旗の社会の間や日本人とモンゴル人の間に、ある程度の信頼感を生みだした。後に、後旗が「新中国」に属することになり、社会主義の道へ歩んだが、そのイデオロギーがまだ殆ど社会主義化されていなかったのであった。

(2) 1955年に、後旗の政府がジリガラン鎮からガンジガ鎮へ移動し、1958年9月3日にガンジガ第一中学校（一中）を建てた<sup>6</sup>。すなわち、後旗は中国共産党政権によって、社会主義・共産主義の道を歩み、10年余りの年月を経て、一つの高級中学校が建てられたのであった。しかし、資料によると、学校をつくることにおいて、政府は「指示」を出したが、あまり出資しなかった。「当初は、モンゴル人生徒と漢人生徒を募集し、『蒙・漢合校』であった。5個のクラスと18名の教師がいて、副教務主任がヤンツンジャブ氏であった。校舎が

足りないため、1960年7月16日から10月4日まで、副教務主任のジリガラ氏が、教師や生徒を連れて、ガンジガ鎮の東にあるハフハ村付近で、4万個の煉瓦をつくり、校舎を建てた。毎年春になると、教師と生徒が耕作し、水路を造り、畑で働いて、夏に畑の草を刈り取り、井戸を掘り、南河谷を整理する。秋に野菜を収穫し、冬にアルガル（牛のフン）を拾い、ホウルスタイ・ハック（北湖）から蘆を運んでいた。授業以外に、重い労働を荷われて、活気を失っていた<sup>7</sup>のプロセスで建てられた。

1958年まで、各ヌタッグや村での、小学校の状況について、歴史の資料や政府の公文書に書かれているが、殆どの学校は寺院を中心とした「伝統」学校や、満州国時代に建てられた「国民学校」を基にして作られた学校であった。後旗政府には、1949年に「後旗における学校の統計」があるが、政府の出資によりつくられた新しい学校の資料がなかった。一中は、モンゴル出身の教師とモンゴル人の生徒を中心として、後旗におけるモンゴル教育の枢軸である。また、後旗におけるモンゴル学校の教師たちは、元々満州国の教育を受け、日本人との関係などがあり、1964年までに「粛清」されなかった。

## 2. 後旗における「新しい三反運動」と「四清運動」の概略

(1) 1960年5月18日、中共中央委員会は、「農村において『三反』運動を展開する指示」<sup>8</sup>を發布し、「三反運動」が行われた。運動の原則には、「我々幹部の陣営に隠れている地主、富農、反動分子、悪い分子などを必ず摘発し、一律に粛清し、党内に混入したモノを党から排除し、法律的に制裁すること。処分を受ける人数を概ね総人口の3%以下にして、免職する人物と、党籍を取り消す処分を1%に抑えること」<sup>9</sup>と指定した。この背景で、1960年6月28日、中共内モンゴル自治区委員会の「三反指導小組」は、「三反運動中に

における若干の問題に関する意見」<sup>10</sup>を公布し、「農村での範囲には、公社と管理区の幹部、小隊の隊長、会計、管理員、保管員などを含める。小、中学校（教師と職員）は、一律に『三反』運動に参加しないことである。高等学校と各幹部学校の教師と職員は、短期訓練を受ける。参加させる幹部の比率に関して、中央の指示と同じく3%とする」<sup>11</sup>と明確に示した。これらが、当局が始めに教育に対して指示したことであった。そして、当局は後旗の現代教育のソフト面で、教師や生徒たちの思想をクリアする運動が始まった。

従って、1962年1月29日、中共内モンゴル自治区委員会は、「農村、牧畜区に社会主義教育を深く続けることに関する意見」<sup>12</sup>を出し、「農村と牧畜区における幹部、党員、農民、牧民が含まれる」ことであった。さらに、同年の12月27日に、「今冬明春に農村に整風、整社事業を行う通知」<sup>13</sup>を出し、「農村の幹部らと党員を整理し、公社や大隊を整理する」ことであった。その結果、その運動が後旗の「一中」にも向かってきた。さらに、1963年4月2日、中共内モンゴル自治区委員会は、「1963年に高等学校の進学試験に出願する高校生に対して、政治審査を行う通知」<sup>14</sup>を出し、生徒の家庭出身が地主、富農、反動分子、悪い分子、右派分子であれば、「清浄な歴史」ではないため、試験に参加させないことであった。(2) 周知の通り、1962年9月に中国共産党第八次十中全体会議で、毛沢東は「階級闘争を絶対に忘れるな（千万不要忘憶階級闘争）」という呼びかけを行ない、全国で社会主義教育が行われた。そして、翌年の2月に、中共中央の会議で、毛沢東が「修正主義」を防止することを呼びかけ、「四清」運動が行われた。その結果、中共後旗委員会（「旗委」と省記する）社会主義教育事務室は、1963年8月から11月にかけて、『「四清」を綱領とする社会主義教育によって、公社の幹部と各大隊の幹部を整理した」<sup>15</sup>のであった。その一方、後旗における直属機関、公営企業、小中学校の教師や職人に対して、「肅反、整理」事業を行っ

ていた。また、1963年11月15日から「全旗における肅反、整理事業の計画に関する意見」を出し、「過去に肅反、整理されなかった機関や学校に必ず1963年に採りを入れ、対象となるものを列挙し、1964年に徹底的に肅清する」<sup>16</sup>ことになった。この計画に、一中の教師、生徒、役人が含まれた。そして、1960年から1964年にかけて、後旗の社会では様々な運動や政治的活動が交錯して、人間関係が非常に複雑であった。その上、「反右派闘争」や「大躍進運動」によつての餓死事件や自殺事件が貧困問題と、1959年の「チベット事件」の宗教に関する影響などが交錯し、社会に恐怖の気分が漂ったのである。

### III 「民族分裂集団」案件のプロセス

#### 1. 生徒のラントウ（趙・朗頭）氏と劉國卿氏

1961年8月、旗委は、上級の政策に対応して一中に党支部を建てる計画があった。そして、宣伝部の副部長であったデルゲル・ザン氏を一中の校長として派遣し、ゾウルヘ氏を中共一中団総支部書記として派遣した<sup>17</sup>。ラントウ氏は、1961年9月に、一中の高校一年第クラスに入学し、班長（クラス長）になり、同級生の間で協議して、モンゴル族の将来のために、誰が何をやるかという問題提起もして、各人に物理学、化学、数学、歴史などの科目をそれぞれ「任務」として分担させて、一緒に頑張っていくつもりだった<sup>18</sup>。

1962年10月上旬、一中の党支部の命令で団総支部委員会は、全クラスの団支部書記を改選することであった。しかし、ラントウ氏のクラスで選ばれた支部書記は、団総支部書記と担任の先生がすでに定めた候補者ではなかった。このことが「民族分裂案件」（以下は「案件」と略記する）が発生した導火線であった。なぜならば、ラントウ氏がクラスの生徒たちを説得して、団支部書記の「選挙」を自分の考えた通りの結果としたのである<sup>19</sup>。

当時、ラントゥー氏の担任の先生であった劉国卿氏に対するインタビューによると、彼は、「各クラスにおける団書記は、一貫して党支部書記の『接班人』であり、党支部からの指導に無条件に『服従』し、党に対し非常に忠誠である人物によって担うことが常識であった。当時、私は若くて、共産党の各級機関に関する『規則』を十分に理解していなくて、未経験であったため、生徒とともに一致し、団総支部書記と喧嘩した。それが団総支部書記の怒りの元になった」と語った。

さらに、1964年2月、副教務主任であったヤンツェン・ジャブ氏が旗委による「四清」運動に参加し、「社会主義教育」を受け、一中で、革命の伝統における教育が行われ、同時に教師や職員の家系の歴史と村での出身歴史に関する活動も行われた<sup>20</sup>。このように、党支部を設けて、団支部書記らを改選する変遷の中で、劉国卿氏と生徒のラントゥー氏の動機や言論は、当局の事業に差し障る対象となった。

## 2. ラントゥー氏の動機

筆者は、2009年9月、現地調査に行き、ラントゥー氏にインタビューした。彼は「高校の時、モンゴル人民共和国の総書記であったツデンバラ氏が内モンゴルへ訪問したことを聞いて、心が温まる思いがし、また、当時私の読んだある本の最後に『ハルハ・モンゴルとウブル・モンゴルは、一つの祖先である、同じ民族である為、何時か合併するはず。この任務を未来の青年たちに託す』と書かれていた。この文の深い意味は、その『任務』を我々青年に頼んでいるから、我々が必死に頑張っていて、モンゴル人の将来のために何かできると思って、クラス・メートの間で話題にしていた』と言った。

当時（1962年10月）の団支部書記の選挙について聞くと、彼が「元団支部書記は、一中の団総支部と秘密な関係を結び、クラスの内部のことを密告していたことを皆で察知した。そして、選挙する際、皆で元の団支部書

記へ投票しなかった。その上、担任の劉先生（劉国卿）も我らと親しんだが、元の団支部書記とはあまり親しくなかった」と語った。これについて、劉国卿氏は「我がクラスで行った団支部書記選挙の結果が、一中の庭で『爆弾の様なニュース』になった。そして、私と総支部書記との関係が微妙になり、総支部書記が私に不満になった上、ラントゥー氏のせいであるとも感じた。書記が私からクラス長であるラントゥー氏の動機について聞くと、私が当時若かったため、身分が高い書記と喧嘩した。のちに、我がクラスの生徒たちが私に対して『外モンゴルと内モンゴルは、なぜ合併しないのか』、『中華の華と言う文字が漢人を代表しているかどうか』、『現在、民族が真に平等であるか』などの質問が問われた。私がこれらのことを学校のデルゲル・サン校長とヤンツェン・ジャブ教務主任に報告した」<sup>21</sup>と書いていた。

また、「当時に我がクラスで、数件の『政治事件』が発生した。黒板に『彭徳懐万歳!』、『オラーンフ万歳!』、『×××は、空虚な理論家である』と誰かによって書かれていた。これは自然に『階級闘争』において、積極分子たちの密告する材料になった。これらのことが上級へ報告されたかもしれない。その時、国際情勢も緊張していて、1963年4月、後旗の宣伝部長が一中に来て、専ら民族問題についての報告をし、学校の指導者がクラスに行き、討論させていた。生徒たちが非常に緊張して、指導者に対して『熱烈』ではなかった。のちに、1963年末に、公安局がもう一つの『民族分裂案件』（白長水氏の民族分裂案件）において、捜査を行い、ラントゥー氏も連座させられた。白長水氏は、ラントゥー氏と親しい関係があるため、生徒のラントゥー氏も公安局に呼ばれ、色々拷問された」<sup>22</sup>と書いている。

## 3. 恐怖の夏休み

旗委は、一中に党支部を設けた以後、人々に対して詳しく監察する事になった。「1964年の7月、学校から既に通知を出し、全体の

教師と職員及び高三クラスが休みなしに政治運動を行うこととされた。7月22日に、学校の書記と校長が政治運動を開始する動員指令を出し、『民族分裂集団』と闘争する政治運動を開始し、公安局、検察庁、裁判所の工作組が学校に駐在した。23日にアイマッグからも工作組(盟工作組)を派遣され、『民族分裂集団』を摘発するために、学校に駐在した。そして、二つの高三クラス生徒を合併して、報告を聞きながら皆で討論し、学校全体とともに昼夜をおかず『民族分裂活動』に対して『開戦』した。二つのクラスの担任であった私とジョド(紹道)氏が工作組によって、学校やクラスから疎外され、他の人物がクラスを担任した。私が旗政府の教育課に呼ばれて、中学校の試験データを集計させられることになった。

そして、四、五日以後、ガンジガの映画館で、全体教師と生徒及び旗委、政府の幹部らが集まって、『民族分裂集団』を批判する大会議を行った。私も呼ばれて参加させられた。会議の主催者により選ばれたツヤガン・ショブー氏が高三・二に関する『ラントウー民族分裂集団』を摘発させた。二年の間、担任教師として教えたクラスが『民族分裂集団』になり、とくに、一番賢くて可愛い、信頼があるクラス長のラントウー氏がボスにされたことを思い起こして、非常にくやしくて、つらかった<sup>23</sup>と劉国卿氏が書いていた。それによって、この事が後旗全体の幹部らへイデオロギーの「教育」するサンプルになった。

筆者が2009年10月、ガンジガ鎮に行き、劉国卿氏と会った時、彼がこの「案件」について資料を渡しながら、「幸いなことは、当時のいわゆる『民族分裂集団』の生徒たちが一貫して、担任であった私をその集団のメンバーとして摘発しなかった。運動が終了する際、私に対して、指導者たちからの結論は『集団のメンバーとして疑わしいが、事実的根拠がなかった。しかし、階級闘争に関する観念が弱くて、反革命集団を庇った過失だった』」と言った。しかし、これらのことが「文化大革命」の時期に、劉国卿氏が二回も繰り返して「反

革命分子」とされた「根拠」になった。

1964年の夏休みに、アイマッグ工作組と後旗公検法組及び一中の党支部、団総支部によって、もう一つの「民族分裂活動」が摘発された。すなわち、一中の化学課程の教師である包俊卿であった。包俊卿氏は、1958年、蘭州師範大学の学生として在籍していた時期に、「心に思っていることを党に吐き出す(向党交心運動)運動」の際、「私が走り幅跳をすれば、内モンゴルからモンゴル国の国境まで行ける」と言ったことがあったそうだ。このことが1964年になって、「階級闘争」の「根拠」として、包俊卿氏が「民族分裂活動者」と見なされ、走り幅跳びをすることによって「逃走」する動機とされ、拷問された<sup>24</sup>。このように、教師たちに対して当局のイデオロギーと異なる人々を肅清し始めた。

#### 4. ラントウー氏に再度のインタビュー

2010年10月に、筆者はラントウー氏にインタビューした。彼は、「今までに共產党の良い面は私に見えなかった」と言い、何十年もの間、誰にも言えなかった心に溜まった無実の罪を着せられた事を思い出し、やりきれない思いをして、窓の外をじっとみつめていた<sup>25</sup>。彼は「当局は私に『自分の過失と思いを詳しく報告せよ』と、強制的な命令が下った。しかし、私が皆の前に、舞台に出て行って、『私には過失は一切ない。今、自分もそう思っている』と発言し、過去のことを否定しないように明確に述べた」と語った<sup>26</sup>。

1964年8月に、彼が統一試験の結果も見ることなしに、一中の党支部と旗委により、強制的に故郷へ帰らせられ、労働改造に参加させられた。故郷に帰ってから、地元の大隊書記(村の党支部書記)により、民族問題の原因でしばしば村幹部会議に「批判される」対象になり、拷問されたり、拷責されたりした。彼は「このような事が絶え間なく続き、1966年になって、さらに厳しく批判されてきた」と言った。1968年2月27日に、彼が郵便局の職員であるツツゲ氏と結婚したが、3月10

日に妻のツツゲ氏も旗委と呼ばれ、「内人党の民族分裂分子」として逮捕され、手錠をかけられて、他の人々と一緒に「内人党隊伍」に連行された。その一方、ツツゲ氏は、ラントゥー氏と結婚した故で、同年の5月に郵便局の職業を停職になった。当時の事について、ラントゥー氏は、「私と一緒に『内人党』と名付けられた人物の中に、1964年に後旗の党委書記であったバートル・サン氏もあった。彼は、後旗党委のトップの人物になり、全旗の幹部らを指揮し、その時（1964年）私たちを『民族分裂集団』と名付けていたのに、1968年になると、私と一緒に『内人党』になった。更に、彼は我々の行列の一番前に並ばせられて、『内人党』の隊伍を示しているように黒色の旗を背負って、皆で遊街<sup>27</sup>された。街や会議場に私の頭と上半身を下に引き吊り、足にまで汗が流れ、両方の足の感覚が麻痺し、大小便することを無感覚になった。監獄に入れられ、外国との連絡があると言う原因でも、殴られたり、蹴られたりして、お正月を過ごして、1969年の6月に釈放され、家へ帰らせられた。監獄で蹴られたことにより、一つの肋骨が折れ、いまだに突出しているままである」と言いながら、肋骨を筆者に見せた。そして、家へ帰ってから、厳しく労働改造を受けながら、折られた肋骨や病気を治療するお金がないため、医療知識を自習してきた。1978年に村で「赤脚医生（医者）」になり、翌年（1979年）に公社の学校で、「民弁教師」（牧畜区や農村における学校の教師）として、従事した。

##### 5. 公文書での「ラントゥー氏」

1964年6月9日に、後旗公安局は一中に対して行った捜査の内容を、それぞれジリム・アイマッグ公安処一課と、旗委へ報告した。その「報告」の公文書は、「ガンジガ中学における包俊清氏<sup>28</sup>をボスとしての民族分裂集団に関して、新しい手がかりが見つかった状況の続き」<sup>29</sup>であり、以下のように記述されている。

(1) 1964年5月22日、一中の団総書記の反

映によると、5月20日、高三・二班の生徒であるツヤガン・ショブー氏の申込んだ「入団申請予備表」が団委からの審査で批准されなかった。指導者が彼と相談する際、彼がラントゥー氏をボスとする小組織に参加し、何回も密謀し、卒業した後、外モンゴルへ亡命すると計画したことなどを述べた。そして、我々がツヤガン・ショブー氏の自首したことを分析し、研究した上、その情報を基本的に信頼があると認識した。

(2) ツヤガン・ショブー氏の報告では、「高二になって、民族の意欲と気持ちが高まり、モンゴル人を統一させることに関しても議論して、漢人をモンゴル地方から追い出すなどのことも議論していた。先生であるアモル・ジリガラ氏が授業中に、『周恩来総理がモンゴル国の総理と談判する際、たとえソ連がボリヤードモンゴルをモンゴル国に返すならば、我々も内モンゴルをモンゴル国へ返す』』と言った。そのため、内モンゴルは、ただモンゴル国と合併してこそ、生活が良くなるという提唱を呼びかけていた。内モンゴル地域で、漢人が日増しに増えて、権力を掌握しているがゆえ、モンゴル人には、職があるのに権利がない。現在は、モンゴル人が漢人によって同化される危険に及んでいる。とくに、修正主義が反対する文献を学習して以降、ラントゥー氏などが修正主義者の放送局の宣伝を聞いて、フルシチョフ氏の論じることが理に適っていることが分かった。例えば、『中国人が現在、一本のズボンを五人で共用している』と言った言葉もあった。毎年、一人当たりの布票<sup>30</sup>が6.5尺であり、五人の布票をあわせれば、ようやく一人の服がつかれる。綿花も足りないものを、なぜフルシチョフ氏の話に反対するのか。実は、フルシチョフ氏の方が正しいのである。5月×日、ラントゥー氏が会議を主催して、彼がモンゴル語を、デゲジルフ氏とトメン・ジリガラ氏が物理学を、マング氏が体育を、ツヤガン・ショブー氏が医学をそれぞれ研究するように計画した。ともに、学内で生徒を説得し、組織を拡大し、卒業して以降通遼市やガンジ

がで集まって、チャンスがあったら外モンゴルへ行くつもりである」と言った。

(3) ツヤガン・ショブー氏は、「モンゴル人の利益のために努力して結党するために、党の綱領を準備し、組織があって、指導者があっての活動をする。モンゴル人を独立させることに貢献することこそ、価値がある人生であると認識した」と言った。要するに、各自が任務を分担し、活動をするようになった。

(4) 彼らが民族を分裂し、集団的にモンゴル国へ逃亡する可能性がある。しかし、包氏と劉氏二人の教員は、確かに民族意識が強いため、期せずして一致した可能性がある、生徒と教師が聯合して集団的案件になる可能性がある。今後は専ら指導的な人物を派遣し、徹底的に明らかにすること、などのことを書かれている。

後旗公安局は、翌年に「1964年における事務終結報告」<sup>31</sup>と、この「案件」をまとめた結果が旗委と上級党委へ報告した公文書に、「1964年に、我が旗に5個の政治的案件が発生した。その内、民族分裂集団案件が2個、反革命階級的復讐案件が2個、反動的スローガンが1個であった。関連した人々が58名で、その中、主要なメンバーが14名である。この内、人民警察が一人、軍人が一人、生徒が8人、医務學員が一人、新たに生じた人物が一人、歴史的な反革命者が一人、新たな革命者が一人であった。彼らの一人を逮捕し、一人を拘留し、二人を外地に処分し、7人を批判闘争して、一人を批判教育した。とくに、処分した2個の民族分裂集団案件は、共産党と人民に反対して、祖国の統一と民族団結を破壊する反動的綱領があり、モンゴル革命党を組織し、内・外モンゴルを合併するために、一代で出来なければ、何代に渡つても闘争していくことであった。とくに、ラントゥー氏を主とした案件について、アイマッグの党委と旗委の指導で、各方面の機関がよく協力した結果、20日間の時期で効果を果たしたのである」と示されている。公文書では、ラントゥー氏を「民族分裂案件」のボスとして定義している上、

黒板に書かれたスローガンは、「反革命的」内容になり、高校生たちが議論したことが党委や団総支部によって、摘発され、公安局に「反革命、民族の団結を破壊する、祖国の統一を分裂する」などと公安局に都合よく定義され、迫害を加へえられたのであった。その上、旗委は、検査院と裁判所など法制機関の決議もなしに、ラントゥー氏を「民族分裂案件」の「主犯」と定義し、後旗及びジリム・アイマッグに通報した。

## 6. 「案件」と文化大革命のつながり

ラントゥー氏は、1964年の8月に故郷へ帰らせられて、労働改造に参加させられた。だが、二年間にも至らず1966年6月になると「文革」の大渦中に巻き込まれた。

後旗における「文化大革命」は、一中から始まった。1966年6月18日に、全校の18個のクラスが授業を停止し、「文化大革命運動」に参加し、学校党支部の指導で、物理学と化学のラボラトリーを中心場所として、壁新聞(大字報)を貼り出した。6月23日から、全体黨員と「積極分子」たちが署名した「2001番号」と言う壁新聞が貼り出され、副教務主任であるヤンツェン・ジャブ氏を猛烈に攻撃し、また包徳氏と包俊卿氏がひどい目にあわせられ、すべての教師と職員、及び旗の直屬機関のすべての幹部らが参加させられた。そして、ヤンツェン・ジャブ氏、包徳氏、包俊卿氏など三人の教師を隔離審査することが公布された。のちに、後旗党委は、一中へ工作組を派遣し、公安局は、専ら案件組を派遣し、教師と生徒との中に「存在」する「民族分裂主義分子」、「反革命分子」、「牛鬼蛇神」を探し出すことになった。後旗党委と公安局は、この目的を達するために、一中の教師と生徒たちを学校に120日間、閉じ込め、249人が「反革命分子の牛鬼蛇神」にされて、11名の教師が「民族分裂分子」にされた<sup>32</sup>。劉国卿氏は、その11名に含まれ、主な罪名は「1964年、高2の2クラスにおける『民族分裂集団』を庇い通した」ことであった。その故に、「民

族分裂案件」が再び「探し出され」、故郷で苦しく「労働改造」を受けていたラントゥー氏が逮捕され、大衆専政委員会（群専）によって監視され、拷問され、刑務所に入られた。

その次、党委の「紅衛兵」が一中の教育を造反し、「民族分裂集団」に関連する人物を探し出すために、学校の教室や実験室など教育設備を破壊した。その一方、軍隊が駐屯した。このような恐ろしい雰囲気が2年間も続き、1968年から、一中の「内モンゴル人民革命党（内人党）」を探し出す運動が始まって、教師と職員たちを「学習班」に参加させ、「内人党」と「戦う」ことになった。1969年1月4日、後旗革命委員会は、一中と言う学校名を取り消しにし、一切の財産、職員、教師、教室などが「五・七幹部学校」にされ、教師や職員たちが「内人党」を探し出す政治闘争に参加させられるようになった<sup>33</sup>。劉国卿氏は、「会議は、1969年2月3日から始まり、二日間に行なわれた。そして継続して17時間の『内人党を促して投降させる大会議』によって、人々が強制的に『反革命者』、『内人党』分子にされた。私もその一人だった」と語った<sup>34</sup>。

そして、一中の50年間の歴史で、何回の「民族分裂案件」以外に、文化大革命が始まった途端に、もともとの「民族分裂集団」をたま探し出し、11名の教師と249名の生徒を「民族分裂分子」として、無実の罪を着せ、「反革命」分子と「牛鬼蛇神」分子として拷問した。そして、教師と職員の70%を占める42名の人々が「内人党」として摘発された。その故、常に読書の声が聞こえていた教室や学校は、犯人を入れる刑務所になった。その後、「ガンジガ中学校」と言う誇るべき名前が強制的に「五・七幹部学校」に変えられ、教師と生徒が「工人宣伝隊」と「幹部宣伝隊」に替わり、十年間に渡り「打ち、破り、奪う」混乱に巻き込まれた<sup>35</sup>。

1978年の末になって、当局から次から次へと「落實政策」の公文書が出され、1979年に、後旗及びジリム・アイマッグは、吉林省から再び内モンゴル自治区に属することに戻り、

既に繰り返して肅清を受けた一中がジリム・アイマッグの「重点的な中学校」として認められた<sup>36</sup>。劉国卿氏は「民族分裂案件」を上訴したが、返事はなかった。ラントゥー氏らの「民族分裂分子」と言う「帽子」が外されたが、一般の人たちのラントゥー氏に対してのイメージはまだ「民族分裂案件」のボスとして続いている状態であった。

#### IV. おわりに

当事者であり、一中の歴史にも詳しいエミン・ウンドル氏は「一つの迫害を受けた事件は、1964年に発生した『民族分裂集団』を探し出した事件である。学校の庭に、警察と軍隊が駐屯し、旗委や政府の人物らが行ったり来たりして、騒動を起こし、白色テロの雰囲気であった。そして、20日間に、昼夜を分かたずに会議を行ない、大きな声で批判させ、事実と嘘を交ぜ、最後に、まだ子供である我々の仲間からラントゥー氏、マンガ氏、トメン・ジリガル、デグジリフー氏、ノルブ氏などを『民族分裂集団』の主犯として、罪を着せた。のちに全旗の幹部会議で、彼らを批判し、労働改造を受ける対象として農村へ還らせた。その結果、彼らの理想が失われ、一生の元気が無くなった。実は、彼らは、我々のエリートであり、モンゴル民族を愛する、卓越した人物である。彼らは、自分の理想を民族の運命と結びつけながら、『モンゴルのために』、『モンゴルを新興させるために』努力する青年たちであった」<sup>37</sup>と、評価し、とくに、下線の箇所を、ラントゥー氏と彼らの仲間たちの事を分析して評価した。

1964年に一中の生徒たちを「民族分裂集団」と定義した一中党総支部と旗委のトップの人物であったバートル・サン氏も、1968年に「内人党」のメンバーとして、拘禁されたり、拷問されたり、「五・七幹部学校」に参加させられたり、厳しく労働改造を受け、ラントゥー氏たちと一緒に迫害された。この事実から見れば、共産党中央委員会と中共内モン



ゴル自治区委員会の目的は、ただ社会主義や共産主義に反対した者に対する肅清だけでなく、異民族に対して、とくにモンゴル人に対するの精神的な肅清と肉体的な苦難を与えたことが分かる。これについて、劉国卿氏は、「ラントゥー氏と私は、『民族分裂集団案件』に関わって批判され迫害された。しかし、1966年の末になると、『反動路線』が起こって、我々を批判し圧迫した人物たちが押し倒されて、逆に他の人々に批判されるようになった。更に、我々は逆に『造反』し始め、『紅衛兵』たちが、彼らを批判して、我々を『徹底的に見直した』。そして、1968年になって両方も批判された」<sup>38</sup>と語った。「案件」の主な流れと筋を分析すると、これは文化大革命の準備作業であると考えられる。

「案件」は、政治制度だけの問題であるならば、漢人社会の中学校にも「民族分裂案件」が出てくるはずだ。だが、一貫して漢人社会や漢人学校の中で、「民族分裂」と言う案件が一回も発生しなかったのである。階級における理論のように、ラントゥー氏と後旗党委の書記であったバートル・サン氏は、異なる階級の代表者として、両者がお互いに戦っていた。しかし、「内人党」を探し出す時に、この二人が例外なく「内人黨員」として、同時に迫害された。このケースを見れば、二人ともモンゴル人であったことが主な原因であると考えられる。

政治的背景によって当局により作り上げられたこの「案件」は、後旗だけで発生した問題ではなく、他の旗やアイマッグ及びフフホト市でも、しばしばこのような「案件」が発生していた。この「案件」は、他の地域で行なわれた多数の「案件」の典型的な「民族分裂集団案件」である。「案件」の具体的な詳細を明らかにしたことから、内モンゴル地域とチベット地域及びウイグル地域で発生したその他の「民族分裂案件」とは何かをも理解することに手掛かりを与え、それを通じて、中国の「民族案件」の本質を理解することに大きな役割を果たすことになるだろう。

## 註

- 1 ボルジギン・文正、ナドメド 主編「甘旗卡第一高級中学《輝煌五十年》（1958年～2008年）」、2008年7月15日、ホルチン左翼後旗、予樹全『輝煌五十年』、1頁。
- 2 中共科左後旗人民政協 編「科左後旗文史資料（第六輯）」、444頁。或いは「解放前的科左後旗教育——根拠張天惠遺稿整理」より。
- 3 バガン主編「科尔沁左翼後旗誌」、内蒙古人民出版社、1993年10月、フフホト。727～728頁。
- 4 同上書、728～730頁。
- 5 プヘ、サイン（博和、薩音）整理・編写「博彦滿都生平事略」、内モンゴル大学図書館、1999年、60～64頁。或いは、プヘ、サイン著「蒙民厚生会与“土地奉上”」。
- 6 ボルジギン・文正、ナドメド 主編「甘旗卡第一高級中学《輝煌五十年》」、予樹全『輝煌五十年』、1頁。
- 7 劉国卿 著「楓葉紅了」、京華出版社、2002年、北京。73～74頁。（この本は劉氏の自伝になる本である）。
- 8 ホルチン左翼後旗檔案局、旗委檔案（長期）、194巻、2～7頁。巻のタイトル「中央、華北局、内蒙、哲盟委、関予在農村中開展“三反”運動的指示、批転天津市委関予深入開展城市糧食三反運動的報告和有関試点材料通知、簡報」、公文のタイトル「中央関予在農村中開展“三反”運動的指示」、中発（60）452号、1960年5月15日。中共中央弁公庁机要室、1960年5月18日発布。
- 9 同上巻、同上公文。
- 10 同上巻、95～100頁。公文のタイトル「転発内蒙党委三反領導小組関予『三反』運動中若干問題的意見」、（60）旗212、1960年6月28日。
- 11 同上公文、1～3頁。
- 12 ホルチン左翼後旗檔案局、旗委檔案（長期）、275巻、19～21頁。巻のタイトル「内蒙党委、弁公庁：関予印發烏蘭夫檢查要点、自治区党委歴次檢查匯集、自治区人代会政

- 府工作報告、印發三個重要參考資料的通知」。  
公文のタイトル「批轉內蒙古党委宣傳部關於在農村牧區繼續深入開展社會主義教育的意見」、(62) 旗 016、內蒙古党委辦公廳秘書處、1962年1月29日印發。
- 13 同上卷、公文のタイトル「關於今冬明春開展農村整風整社工作的通知」、(62) 旗 159 (秘密)、1962年12月27日。
- 14 ホルチン左翼後旗檔案局、政府檔案 (永久)、131 卷、19～21 頁。卷のタイトル「七個國營農・牧・林場評級站隊工作轉正的通知」、增設機構的通知、甘旗卡小學為旗直實驗小學的通知、對高永生處分問題的決定」、公文のタイトル「關於對一九六三年報考高等學校的考生進行政治審查的通知」、(63) 教高字第 34 号 (机密)、內蒙古自治區教育廳、公安廳、民政廳、人事局、1963年4月2日。
- 15 ホルチン左翼後旗檔案局、公檢法檔案 (永久)、240 卷、23～32 頁。公文のタイトル「中共科左後旗委社會主義教育辦公室關於以四清為綱的社會主義試點工作終結報告」、中共科左後旗委社會主義教育辦公室、1963年11月21日。
- 16 同上卷、33～41 頁。公文のタイトル「批轉旗委肅反清理領導小組“關於正個肅反清理工作的具體計畫”」、(64) 2 号、中共科左後旗委員會、1964年1月24日。
- 17 ボルジギン・文正、ナドメド 主編「甘旗卡第一高級中學《輝煌五十年》」、『大事記 (1958 年～2007 年)』、47～48 頁。
- 18 2009年9月、後旗に行われた現地調査。筆者が「ラントゥー氏にてのインタビュー」に基づいてつくられた。
- 19 劉國卿 著「楓葉紅了」、京華出版社、2002 年、北京。76～77 頁。
- 20 同上書、49 頁。
- 21 閻天倉 主編「科左後旗文史資料」、後旗人民政協委員會、2005 年。523～524 頁。
- 22 同上書、524 頁。
- 23 閻天倉 主編「科左後旗文史資料」、後旗人民政協委員會、2005 年。525～526 頁。
- 24 劉國卿 著「楓葉紅了」、京華出版社、2002 年、北京。88 頁。
- 25 2009年10月2日に、ラントゥー氏にインタビューした内容。
- 26 同上インタビュー内容より。
- 27 中国語で「遊街」と書く。文化大革命時期に、党支部によって行なわれる「犯人」を村や町の道路で、往復に行ったり来たりさせ、群衆に対して懲戒する懲罰である。
- 28 実は「包俊卿」氏のことであった。公安局の秘書が「包俊清」と記録していた。本当の名前は「包俊卿」である。
- 29 ホルチン左翼後旗檔案局、公檢法檔案 (永久)、229 卷、111～115 頁。卷のタイトル「旗公安局關於警衛的終結報告及政保工作的終結報告」、公文のタイトル「科左後旗公安局關於甘中以包俊清為首民族分裂集團線搜新發見情況的統報」、(64 年) 後公偵字第六号、1964年6月9日
- 30 中国での綿布配給切符。中国のいわゆる「計画的經濟」の時代に、綿の布地や衣服を購入する際に代金とともに渡す配給切符。1984年まで、「布票、綿票、線票、糧票」を使用していた。
- 31 ホルチン左翼後旗檔案局、公檢法檔案 (永久)、229 卷、47～56 頁。卷のタイトル「旗公安局關於警衛的終結報告及政保工作的終結報告」、公文のタイトル「科左後旗公安局一九六四年政保工作終結報告」、1965年2月15日。
- 32 劉國卿、那達木德 主編「甘旗卡一中誌 (1958-1997)」、「『三起民族分裂案』始末」(295～298 頁)。
- 33 劉國卿 著『艱難的經歷、不渝的追求』、科左後旗人民政協 主編「科左後旗文史資料」、第六輯、526～527 頁。
- 34 同上書、527 頁。
- 35 ボルジギン・文正、ナドメド 主編「甘旗卡第一高級中學《輝煌五十年》」、179 頁。または、エミン・ウンドル 著『愛的回憶——唯我獨享的神聖的文化搖籃』より、2007年12月31日。
- 36 中共科左後旗人民政協 編「科左後旗文史

資料（第六輯）」、528頁。或いは、劉国卿著「艱難の経歴 不渝的追求」より。

37 同上書、178頁。

38 中共科左後旗人民政協 編「科左後旗文史資料（第六輯）」、526頁。或いは、劉国卿著「艱難の経歴 不渝的追求」より。

#### 【参 考 文 献】

1. ベマ・ギャルボ 著『チベット入門』（改訂新版）日中出版、東京、2000年。
2. ベマ・ギャルボ 著『最終目標は天皇の処刑』（中国「日本解放工作」の恐るべき全貌）飛鳥新社、東京、2012年。
3. ベマ・ギャルボ 著『日本の危ない！中国の危うさ！！-日本とインドの強い絆と可能性』神保泰宏 東京、2013年。
4. ベマ・ギャルボ 著『中国が隠し続けるチベットの真実—仏教文化とチベット民族が消滅する日』扶桑社、東京、2006年。
5. チベットハウス 編 小林秀英 訳『チベット仏教の神髄』日中出版社、東京、2002年。
6. ブランドン・トロボラ、ルーク・バックルズ神父 著、石塚政樹 訳、ベマ・ギャルボ 監訳『世界の宗教』総合法令出版株式会社、東京、2003年。
7. 高尾 利数 他17名 著『世界の宗教』自由国民社、東京、2004年。
8. 宋永毅 編 松田州二 訳『毛沢東の文革大虐殺』原書房、2006年。
9. ボルジギン・フスレ『中国共産党・国民党の対内モンゴル政策（1945～1949）：民族主義運動と国家建設との相克』風響社、2011年。
10. ボルジギン・フスレ 著「内モンゴルにおける文化大革命直前の政治状況についての一考察—内モンゴル大學における『民族分裂主義分子』批判運動を中心に—」、昭和女子大学、学園・総合教育センター特集 No. 811（24）～（37）（2008・5）東京。
11. ボルジギン・文正、ナドメド 主編『甘旗卡第一高級中学-輝煌五十年』2008年。
12. 閻天倉 主編『科左後旗文史資料』後旗人民政協委員会、2005年。
13. 劉国卿、那達木德 主編『甘旗卡一中誌（1958-1997）』、附：『「三起民族分裂案」始末』（295～298頁）。
14. 劉国卿 著『艱難の経歴、不渝的追求』出版社と時期が不明。
15. 劉国卿 著『楓葉紅了』京華出版社、2002年、Beijing。
16. チベット作家ウエセブラック、また (<http://www.rfa.org/mandarin/pinglun/weise/woeser-04282014101017.html>)、2014年10月10日。
17. 曹永年 主編『内蒙古通史』内モンゴル大学出版社、2009年、Huhehot。
18. 德勒格、烏雲高娃 編『内蒙古ラマ教近現代史』遠方出版社、2004年、Huhehot。
19. 内モンゴル自治区少数民族教育研究会 編、「民族教育論文集」（モンゴル語版）、内モンゴル教育出版社、1987年、Huhehot。
20. 黄奮生 編『蒙藏新誌』（上）、中華書局。
21. 内蒙古自治区委員会文史資料委員会 編『偽滿興安史料』（第34集）内蒙古政協文史和学习委員会、1989年、Huhehot。「東後旗ラマ学校」。
22. オランフー研究会 編、「オランフー論民族工作」、中共党史出版社。
23. 内モンゴル自治区档案馆 編、「中国第一個民族自治区誕生档案史料選編」、遠方出版社、1997年。
24. 科左後旗档案局「政府档案」（部分）、（1946年～1982年）。
25. 科左後旗档案局「旗委档案」（部分）、（1946年～1982年）。
26. 科左後旗档案局「公檢法档案」（部分）、（1963年～1982年）。
27. 科左翼後旗誌編集委員会主編『科左翼後旗誌』（1989～2007年）、内蒙古文化出版社、2008年版（海拉爾市）。
28. 施聯朱 著『施聯朱民族研究文集』民族出版社、2003年、Beijing。